発表題目：通訳翻訳学による日本語と英語の対照―等価概念をめぐって―

要旨：（1000 字以内）

本発表は、英日語を比較対照する際によく使われる原文と翻訳の比較という手法の限界と有効性を論じることを目的とする。

二言語の比較対照を行う際、一方言語のテクストと、他方言語によるその翻訳を使うケースは多い（國廣 1982, 池上 2007 など）。しかし、脱コンテクスト化された単独のセンテンスを引用して両言語の表層構造をセンテンス単位で比較対照することに対しては、近時の通訳翻訳学の学説から多くの批判が出ている（Pym 2010 など）。その批判の主な点は、通訳翻訳行為は二言語間の「言語行為」のみならず二文化間の「社会行為」であり、そこには何らかの社会的、文化的な「操作」が関与しているため、純粋な「等価」の確保は実現不可能である、というものである。

そこで本発表では、まず通訳翻訳学における二言語の比較対照分析の手法、翻訳シフト論、という言語行為に焦点を当てた議論を紹介し、次に機能的翻訳理論、翻訳システム理論と規範論、ポストコロニアリズム翻訳理論、などという社会行為に焦点を当てた議論を概説する。そうすることで、通訳翻訳における起点テクストと目標テクストの「等価」の相対性について理論的に捉え、原文と翻訳の比較という手法の限界について論じたい。

次に、これらを踏まえつつ、具体的事例として、放送通訳（英語から日本語）のデータと、首相演説の外務省による翻訳（日本語から英語）のデータを使用して、認知言語学と言語人類学によるテクストレベルの比較対照分析を行い、英日の各言語の特徴的な「言語らしさ」を抽出する。そうすることで、さまざまな次元における翻訳シフトが存在する中、起点テクストと目標テクストの言語学による比較対照の手法が対照言語学的にはある程度有効であることを実証したい。そして、従来の研究が質的研究に偏重していたことの反省から、量的研究やコーパスを使用した実証研究の可能性についても論及したい。

暫定的な結論としては、日本語は「視点内置・移動型」認知形態で、言及指示対象の現前化力が強い。他方、英語は「視点外置・固定型」認知形態で、自己言及性が強い、という内容であるが、具体的には、テクスト内の結束構造・照応性、テクストと外界の言及指示対象・認知主体との関係性、動詞の捉え方と言及指示対象同士の関係性、センテンス内焦点連鎖構造、外界の言及指示と時制などの論点について議論したい。（991 字）

参考文献：

池上嘉彦（2007）『日本語と日本語論』ちくま書房

國廣哲彌（編著）（1982）『日英語比較講座第４巻　発想と表現』大修館

Pym, Anthony. (2010). *Exploring translation theories.* New York: Routlegde.